

ドイツ語解釈学の撰取について

—— 勝部謙造博士のばあい ——

大 槻 和 夫

はじめに

明治以降、わが国の国語教育は欧米諸国からさまざまなものを撰取してきた。とりわけ、戦前においてはドイツとの交渉が深かった。その一つに、昭和十年ごろを頂点とする、いわゆる「解釈学的国語教育」におけるドイツ語解釈学の撰取がある。ここでは、「独逸国語教育交渉史研究の一環として、わが国の国語教育理論にドイツ語の解釈学がどのような形で撰取されたかを、勝部謙造博士のばあいについて考察してみたいと思う。

一 勝部博士の哲学研究とドイツ語

勝部博士は、大正十三年六月三日、「ドイツ語の哲学」を改造社から出版され、翌十四年五月二十五日には、「哲学の本質」を邦訳出版されている。これらはいずれも、わが国におけるドイツ語研究

・翻訳の最初、もしくはそのもっとも初期に属するものではなかったかと思われる。少なくとも、茅野良男著「ドイツ語」(人と業續シリーズ3、昭和34・6・20 有斐閣刊)の『文献解題』(わが国におけるドイツ語関係文献解題ではもっともくわしいもの)にあげられているもの、およびわたくしの目にしえたもののなかでは、勝部博士のものがもっとも古いと言える。さらに、「ドイツ語の哲学」の『序言』によってみると、本書の草稿は第一次世界大戦(一九一四—一八八大正七年V)以前に成っていたようである。これらを考えあわせると、勝部博士は、わが国におけるドイツ語研究の最初の人ではなかったかと考えられるのである。一般に、わが国のドイツ語研究は大正末期から始められたとされているが、勝部博士のばあいは、研究への着手ということからみると、大正中期以前ということになるようである。

このように早くからドイツ語に注目して研究を進めてこられた

勝部博士は、その後、雑誌「哲学研究」「理想」「学校教育」等にその研究を発表され、昭和三年四月十日には「最近教育哲学の研究」を秀文館から出版、昭和六年三月二十五日には「ディルタイの人生哲学方法論」を京都帝国大学に学位論文として提出、昭和七年九月十五日には「現代哲学の根本問題」を同文書院から出版された。「現代哲学の根本問題」は、生哲学・理象学・基本存在論の三大思想を、「最も現代的であり、而かも亦『永劫の間と答』としての哲学に本質的である」(序言 四ページ)として、それらを「著者自身のフィロゾフィーレンに如何様にアッピールするかといふ処に重点」(同 四ページ)を置いて論述されたものであり、勝部博士の哲学的根底をもっともよく示している著書である。ここに、勝部博士の研究は基礎がすえられたといえよう。

その後、「わかること」の教育観(昭和8・9・5 同文書院刊)、「人間を見つめる」(昭和10・1・15 同文書院刊)によって、勝部博士の人間学・教育哲学を開陳された。ここでは、『わかること』に教育活動の全面にわたる内核的力素を見だし、さらには「人間をわかることが即ち人生の意義であり、人間の修業である。」(「人間を見つめる」序言 一ページ)とされている。勝部博士の哲学は、ここに『わかる』の問題を中核として展開されていくことになったとみられる。

ところで、『わかる』Verstehenは、ディルタイの哲学、とくに精神科学方法論の中心概念である。いまここでディルタイの Verstehen の概念を明らかにする紙幅がないが、これについてはすでに多くの研究がなされており、わたくし自身も、別の機会に発表することがあった。とにかく、勝部博士の哲学は、その根底にディル

タイの哲学、とりわけ精神科学方法論をひそめていと言つてよからう。勝部博士の国語教育論・国語解釈学も、基本的には、ディルタイの哲学に基礎を置くものであったと考えられるが、以下においては、勝部博士の「国語解釈学」がいかなるものであったか、その中核をなす思想が何であり、またそれとディルタイ解釈学とはどのようななかかわりをもっているか、さらに、そこには国語教育史上どのような問題があつたかを考察していきたい。

二 「国語解釈学」の構成と内容

勝部博士の国語解釈学に関する著書には、つぎのようなものがある。

(1) 「国語の心」 昭和10・7・20 同文書院
(2) 「国語解釈学」(岩波講座国語教育) 昭和12・1・5 岩波

書店

(3) 「国語解釈学」 昭和13・7・15 (三十刷発行) 晃文社
これらのうち、(2)は(3)に再録されている。また、(1)については、昭和三十六年春、広島大学国語国文学会で報告した。したがって、このたびは(3)について考察を加えることにする。

「国語解釈学」(晃文社刊)は、つぎのように構成されている。

前篇 国語解釈学概説

第一章 国語解釈学とは何か

一 解釈学の成立

二 解釈学の問題

三 解釈学の種類

四 国語と解釈学

第二章 言葉の問題

- 一 言葉の表示的性格
 - 二 内面的自己活動
 - 三 伝達の可能性
- #### 第三章 解釈の問題
- 一 内容の把握

二 構造の分析

三 人間の顕現

四 意義の実現

第四章 了解の問題

- 一 解釈と了解
- 二 了解と直観
- 三 了解と思惟
- 四 了解の完成

第五章 解釈原理の問題

後篇 国語解釈学的研究

第一章 意識の構造と言語の機能

- 一 意識と「ことば」
- 二 「語る」と「知る」
- 三 科学的立場の凶形性
- 四 芸術に於ける類型的見方
- 五 科学と芸術
- 六 芸術の主題性
- 七 言語に依る「伝ふる」の意義

八 言語の連係性

九 国語と国民精神

第二章 言語とその意義解明

- 一 言語の表示的性格
 - 二 意味の客観性
 - 三 生活意図による結合
 - 四 意味の情意的側面
 - 五 文に於ける全体と部分
 - 六 意味の主観性
 - 七 意味把握の過程
 - 八 普遍妥当性の問題
 - 九 具体的生命の妥当性
 - 一〇 意義の実現
 - 一一 全体性の原理
 - 一二 国民性の原理
 - 一三 人間性の原理
- #### 第三章 「読む」の構造的研究
- 一 「読む」の根源的形態
 - 二 音説の意義
 - 三 「語る」の立場への還元
 - 四 「読む」による「こと」の実現
 - 五 「こと」を構成する精神活動
 - 六 「読む」に於けるロゴスの要素
 - 七 分析の態度より総合的態度へ
 - 八 追体験の可能性

九 「読む」の完成

一〇 人間性の顕現

このうち、前編は「岩波講座国語教育」に発表されたものであり、また、後編にも、雑誌「国語教育」に発表された論文が含まれている。したがって、前編と後編とは、所説に重複した部分があり、後編の中でも、多少の重複がみられる。そこで、この考察においては、主として前編を考察の対象にし、後編も随時参照するようになりたいと思う。

前編は五章から成っているが、大きくは三つにまとめることもできる。すなわち、第一章を序説、第二、三、四章を解釈本質論、第五章を解釈原理論とみるのである。このうち、本書の中心をなすのは、第二、三、四章の解釈本質論である。

本書の構成には、すでに勝部博士の解釈学観がみられる。勝部博士は、第一章二解釈学の問題の中で、解釈学の取り扱う問題を四つあげ、その一を言表の問題、その二を解釈の問題、その三を了解の問題、その四を解釈原理の問題とされた。この考え方が、そのまま本書の構成にもなっているのである。

まず、解釈学の第一の問題、すなわち解釈の対象、解釈せられるもの——「ことば」について、勝部博士は、その本質的機能を「表はず」「述べる」「伝ふる」の三つにわけ、それらを発展的段階的に論述しておられる。その結論は、つぎのようである。

「かくの如くにして我々は『ことば』が語られることに依り、そこに三つの要素が融合統一せられつゝあるのを見る。否寧ろ『ことば』の『語り』に於てかくの如き三要素が分析的に区別せられ得ると云ふ方が一層適切であらう。それは語られる『こと』、語

り手、及び聞き手の三つが即ちこれである。」(四二ページ)
この考え方から、こんどは「聞く」方面から「ことば」そのものの問題へと論が進められていく。それがすなわち「解釈」の問題であり「了解」の問題である。

解釈学の第二の問題、すなわち解釈については、そのプロセスを「ことば」より「こと」へ、「こと」より「ことわり」へ、さらに「ことわり」より「ところ」へ、最後には「ところ」より「ことば」へととしてとらえ、それぞれの作用の本質、可能根拠を論述しておられる。その要点をまとめればつぎのようになるであろう。

第一段階の「ことば」より「こと」といふのは、「文そのものの形式及び構造に従ってその意味を明にすること」(四四ページ)換言すれば辞書的文法的意義に従って、その文の筋、ことがら、事実性をとらえることをいう。

第二段階の「こと」より「ことわり」といふのは、「文に即してその文の『こと』の条理を明に」(四八ページ)することである。つまり、細部の構成を明らかにすること、部分と全体との関連を構造的にとらえることを意味する。

第三段階の「ことわり」より「ところ」といふのは、「この文を創作せしめたる『ところ』その者に造這入り込んで行くことである。」(五二ページ)原作者の体験を解釈者が追体験することである。

しかしながら、解釈をもって追体験であると考えてしまうならば、解釈の到達点は原作者の個人的体験であるにすぎないことになってしまふ。そこで、勝部博士は解釈の完成段階としての第四段階を設定された。すなわち、「ところ」より「ことば」へである。そ

の意味は、「客観的約束としての意味より出発して、主観的体験に於て実現せられる普遍的・人間的なるものに到達する作用」（五六ページ）である。ここにいたって、知的なるものが生命的・全人的になり、部分が全体にくみこまれる。「意義」が実現されるのである。

以上の四段階は、解釈作業の手順を意味するものではなく、あくまでも解釈作用の本質を分析的にとらえたものにすぎない。ここで明らかにされていくことは、解釈とはいかなるものであり、その究極にめざされるべきものが何であるかということである。

つぎに、解釈学の第三の問題——「了解について勝部博士はどのように考えておられるかをみていきたい。

まず、解釈と了解の区別であるが、さきに述べた解釈の所論からすれば、解釈は前段であり了解は後段である（つまり、「ことば」より「ことわり」へが解釈であり、「こと」「ことわり」から「こと」へが了解である）とも言えよう。また、解釈は客観的で了解は主観的であるとも言えよう。しかし、勝部博士は、「解釈の極致は『わかること』に見出されなくてはならない、この意味に於て了解は解釈の生命であり、又核心である。」（六二ページ）として、「わかる」（了解）を解釈の中心作用とみておられるのである。

では、「わかること」はどのようにして行なわれるのか。これについても、勝部博士は三段階を考えておられる。すなわち、「視る」（直観）「考ふる」（思惟）「わかる」（了解）である。

「視る」とは、直観することであり、「解釈学の問題としての『視る』は、先づ矢張り『読む』『読み取る』といふことがこれに該当する。素説的の説方、素直な意味の詮察は即ち『わかる』の成

立する第一歩としての『視る』に当るのである。従って解釈に於ける『視る』の対象として現象し来るものは即ち文の『こと』でなくてはならない。『読む』に於てはこの故に先づその説まるゝ文の『こと』が直観的全体として明晰に現はれ来るのでなくてはならない。『こと』は即ち文の姿である。形象である。」（六七ページ）

ところで、「視る」が成立するためには、その根拠に「生存の動的・行動的立場といふことが必須である。」（六四ページ）しかも、そのゆえに、「視る」は「常に前面に投げ出して見る、対向的に作り出し、描き出すといふ特性を持って居る。」（六五ページ）ここに「視る」においては、「視るもの」と「視らるるもの」との分裂的・対向的局面があらわれ、真の「わかる」にまでは達しなくなる。「視る」は進出的外的方向をとるのであるが、真の「わかる」を実現するためには、その方向を転回して、復帰的内向的なみちがとられなくてはならない。その転回点をなすのが「考ふる」（思惟）である。

「考ふる」は「視る」の発展であり、完成である。いく度もいく度も「見る」が重ねられていくうちに、「視る」の方法として一種の機関・組織が成立し、その機関の力によって「視る」を行なう、つまり「抽象」をするのを「考ふる」であると、勝部博士はさわれているのである。したがって、「視る」によって実現されるものは「抽象的全体性」「普遍性」である。「考ふる」は、解釈学的には、「文の形式及び内容の精査・吟味」（七二ページ）にあたる。「ことわり」（ことおよびことばのことわり）の実現ということである。

「考ふる」を右のように考えると、「考ふる」もまた生存の自己自身への復帰から遠ざかっていくかのようにである。客観的真理が主

観化され、生活化されなければ、其の「わかる」が実現されたとは言えないからである。しかしながら、「考ふる」には、「自己の中に深く反省して、沈思黙考、自問自答を重ねて心の中に深く落着かせるといった方面がある。反省的性情とも云はるべきものがある。この性格が『考ふること』をば復帰還元の方面に差し向ける。而してこゝに知的・理論的態度としての『考ふること』が自己の背景の中に姿を隠して居た情意的要素をば再び盤頭活躍せしめることに依り、『わかること』の最後の完成を遂行せしめるのである。」(七二ページ)

かくして「わかること」の最後の段階に達する。「こころ」への還元である。「文を『読み』『精査し』、終に文の真生命としての『こころ』乃至はこの『こころ』に於て、顕現しつゝある『人間』その者を解釈者自身において実現すること」(七五ページ)になるのである。この境地に達すれば、「原作者以上により良く了解し」、「又より良く創作する」(七六ページ)ことになる。

以上、勝部博士が解釈学の問題として立てられた四つの問題のうち三つをとりあげ、それぞれにどのような解答を出しておられるかをみてきた。解釈学の問題としては、さらに解釈原理の問題が残るが、ここでは省略しておきたい。

さて、勝部博士の解釈学を右のようにとらえてみると、そこにはそれぞれに対応関係のあることがみてとれる。これをつぎに図示してみよう。

Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
こころ (人間・ 意義)	ことわり (條理・構造)	こと (專実性)	実現され るもの
伝える (伝達)	述べる (内面的 自己活動)	表わす (表示)	言葉
人間実現・意義 表現(身説)	構造分(内容・ 精査)	内容把握 (説む)	解釈
わかる (気分情調)	考ふる (思惟)	視る (直観)	了解

勝部博士の国語解釈学を右のように整理してみると、その中核をなしているものは、やはり「了解」「わかること」についての考えかたであろうと思う。しかも、その底にあるものは、「言葉」「解釈」「了解」のそれぞれをたらぬく人間哲学・生の論理学であると考えられる。言葉も解釈・了解も、ともに生の運動であり、生の発展的活動であるという考えかたが、その根底にあるのではないか。さきに図示したⅠⅡⅢに、それぞれ生の運動を対応させてみると、Ⅰは生の進出展開活動、Ⅱは生の凝結・固定、Ⅲは生への還元——発展的流動、となるであろう。こうした考えかたは、いわゆる生命哲学の考えかたにほかならず、したがってまたデュルタイの考えかたとも一致するわけであるが、勝部博士の国語解釈学には、この生命哲学以外の考えかたもとりいれられているので、つきにその哲学的背景をもう少し検討しておきたいと思う。

三 勝部解釈学の哲学的背景

勝部博士は、「国語の心」(昭和10・7・20、同文書院刊)の
で、国語教育、とくに読み方教育の「新主張の根底に於いて動き
つありしものと認めらるる主要主張について、その各々の国語教育
に対して持つ意義につき、一瞥を与へて見たいと思ふのである。」
(七ページ)と述べ、それを現象学、弁証法、解釈学の三つについ
て論じておられる。その結論は、およそつぎのようである。

(1) 現象学と国語教育

「……………この故に国語教育はこの現象学的態度に刺激せら
れて起り来れる形象説に依りて、直観、『視ること』、『説む
に於いて働く』、『視る』につき反省考察を試み、一層深くなる
ことが出来た。」(八ページ)

(2) 弁証法と国語教育

「……………かく弁証法は国語に依りてそこに語らるる事象の
意義の顕現といふことに於いて我々を教ふる處大なるものでは
あるが、然しこの場合に於ける顕現は、上記の現象学の場合に於
けるが如き『視る』に依る顕現ではなくして、寧ろ『考ふる』
に依る顕現でなくてはならない。(中略)即ち国語教育はここ
では『語る』に内在する『考ふる』的要素につき深く反省を促
されるのである。」(一〇―一一ページ)

(3) 解釈学と国語教育

「〔解釈学は〕先づ第一にそれは文の解釈に於いて働く我我
の情意的要素、現代解釈学の用語に従へば情調に依る開示とい
ふことにつき、国語教育者に対して自覚せしむところ大なるも
のがある。(一五―一六ページ)

「解釈学の我我に教ふる處ある第二の要点は、文に於ける部

分対全体の関係といふことである。」(一七ページ)
右のほか、「解釈学と国語教育」については、解釈学より学ぶべ
き点として、

(1) 「文を説むことに対する『気分』の取る大きな役割」(一九六
ページ)

(2) 「『説む』がこれに於いて占むべき中心的地位」(二〇〇ペー
ジ)

(3) 「文の解釈に於ける全体とその部分との間の具体的関連」(二
〇四―二〇五ページ)

(4) 「国語教授に於ける練習的方面の重要視」(二二一ページ)

(5) 「『わかる』の三昧的性格」(二二四ページ)

の五点があげられている。これらはすべて、勝部博士の了解から
出てきたことがらで、以上をまとめてみると、

(1) 現象学→「視る」

(2) 弁証法→「考ふる」

(3) 解釈学→「わかる」

となり、けっきょく、勝部解釈学の発想源は現象学・弁証法・解釈
学(人間解釈学)の三哲学であると考えられる。
しかしながら、「視る」→「考ふる」→「わかる」の三段階観は
どこから出てきたのであろうか。それは、結論的に言えば、やはり
ディルタイの「生の論理学」「生哲学」にあると、わたしは考え
る。この点につき若干明らかにしていきたい。

四 勝部解釈学とディルタイ哲学

勝部博士は、「現代哲学の根本問題」（昭和7・9・15、同文書院刊）第一編生哲学の根本問題二生の論理学において、「生の論理学」を、「生を徹底的に了解するための一の完全なる方法説」とし、その特徴の一つとして、それが「生その者の発展実現して行く段階を現はして居るといふこと」（四五―四六ページ）をあげておられる。すなわち、デイルタイの言うフェルシュテューエンとは、生の了解であるとともに、生の発展実現でもあるというのである。生の了解、したがってまた生の発展実現の段階は、デイルタイにおいては、体験↓表示↓了解のプロセスとされている。体験は、客観的なものによって、その流動発展を阻止される。つまり外面化し、表示されるのである。この表示は、つぎに了解されることによって体験となる。「生体験が持続性と豊饒性とを獲得せんがためには、それは自己自身を凝結固定することに依って、云はば一度死することが必要である。凝結固定は体験が生そのまゝとして生動的なものである限り、一度自己自身を完結する階段である。体験が客観性を獲得して知となる第一歩は即ちそれが表示せられることである。表示となりて而して後逆にその表示からして体験が了解せられるといふ處に生の客観化の過程があり、これが又同時に生の前進の過程そのものとなるのである。」（五二―五三ページ）

右のように、体験↓表示↓了解のプロセスは、生の流動発展という点からみれば、流動↓凝固↓流動とされる。この考えかたは、先にみた勝部解釈学の三段階にそのままあてはまり、ここに勝部解釈学の基本構造がデイルタイの「生の論理学」に負うものであることが明らかとなった。

デイルタイの生哲学は、勝部解釈学の基本構造にとりいれられて

いるのみではなく、「考ふる」についても摂取されている。たとえは、勝部博士は、デイルタイの「思惟の仕事は意識に於いて生の諸実在の中に又それ等相互の間に成立せる關係を把握して、而してかくして明晰に意識せられたる単一的、偶然的、所与的のものからして、その中に含まれたる必然的、普遍的の関連に進むといふことである……」（八五―八六ページ）といふことばを引いて、思惟が生流動の凝固・確定化の方面に重点をおくものであり、そのとらえるものが客観的普遍的関連であるとされている。これも、そのまま勝部解釈学の第二段階にあてはまるものと言えよう。

さらに、勝部解釈学の「了解」についてみれば、その大部分がデイルタイに負うものとみられることもできる。たとえば、「了解」が全心的活動であることなどは、デイルタイの生哲学（精神科学方法論）の一大特色であり、周知のところである。さらにまた、部分と全体との関係とか、「意義」とか「追体験」などという考えかたもデイルタイによっている。

部分的にみえれば、勝部解釈学に摂取されたデイルタイ哲学は以上のほかにも数多く指摘できる。しかしながら、勝部博士のデイルタイ哲学摂取の特色は、このような部分的摂取にあるのではない。では、勝部解釈学におけるデイルタイ哲学（解釈学）摂取の特色と問題はどこにあるのであろうか。つぎにこれを略述しておきたい。

五 勝部解釈学におけるデイルタイ解釈学摂取の特色と問題点

まず第一に、勝部博士の国語解釈学におけるデイルタイ解釈学の

撰取は、哲学者、なかんずくドイツ研究者の立場からなされているということである。昭和初期においては、多くの人々がドイツ解釈学を学び、それを国語解釈学に撰取しようとしたが、それらの人々の多くは、国語教育研究者・実践者、教育学者、心理学者であったが、勝部博士はそれらの人々のなかにあって、ドイツ研究の専門家として、独自の地位を占めておられる。この、哲学者ドイツ研究者としての立場が、その国語解釈学におけるドイツ解釈学の撰取のしかたにも、多くの特色を生み出していることは見逃がせない点であろう。

たとえば、その特色の第二として、ドイツの「生の論理学」が根底において撰取されていることがあげられよう。多くのばあいドイツ解釈学という、「解釈学の成立」(Die Entstehung der Hermeneutik)のみをもつて考えられがちであったが、この論文は、実はドイツにあつては、精神科学方法論の解釈学的転回点ないし出発点を示すものにすぎない。ドイツの解釈学は、それ以後の、たとえば「歴史的理性批判」の名で一括してよばれている一連の論文にこそ、その真髄と到達点が示されているのであって、それらをあわせてみるのでなければ、ドイツ解釈学はとらえられないはずである。勝部博士は、それらをもじゅうぶん消化して、そのなかから「生の論理学」をくみだてられ、それを国語解釈学の基本構造とし、さらに「了解」の基本論ともされたのである。ここに、ドイツ解釈学をもっとも包括的統一のとらえ、それを国語解釈学にも生かすという、撰取のしかたの一特色を見いだすことができると思うのである。

右のごとく、勝部博士はドイツ解釈学を肯定的に、しかもそ

の根底において撰取してはおられるが、その国語解釈学に撰取されているものは、ドイツ解釈学だけではない。人間存在論や現象学、弁証法などもある。すなわち、勝部博士のドイツ解釈学撰取の第三の特色として、ドイツをも含めた諸哲学を、一つの勝部哲学として、主体的なフィロゾフィーレンがなされた上で国語解釈学に生かされているということが言えよう。ドイツ解釈学を直接的に適用するのではなく、勝部哲学に消化した上で、いわば間接的に撰取されているのである。これを、「間接的撰取」とよぶこともできるかと思う。

しかしながら、このようにして生まれた勝部解釈学にも問題は感じられる。その一つは、この解釈学がたしてこどもの解釈原理になりうるかどうかということである。原理的には、解釈作用を勝部博士のように考えることもできる。しかしながら、こどもにはこどもの解釈のみちすじがあるはずであり、また、読みの目的や読む材料によっても、その読みかたはさまざまである。ここに、勝部解釈学の一つの問題が残るであろう。もっとも、このことは当時の国語解釈学共通の問題とも言えるが。

第二には、その思弁性・観念性が問題になる。解釈は一つの事実であり、実践の問題であつて、その学である解釈学もまた実践の学にならなくてはならないのではないか。「解釈作用の本質はひとまじりわかつた。しかし、では実際にはどうするか。」という疑問が残る。解釈の実例があれば、解釈学そのものもより具体的になり、実践力をそなえたのではないかと思う。

もっとも、勝部博士のめざされたものは、解釈学の哲学的基礎づけであり、当時の国語教育界の望んでいたのもそれであつたよう

ある。たとえば、勝部博士が「国語解釈学」（晃文社刊）のなかで、当時のわが国の国語教育がその解釈方法の反省期にあることを指摘し、解釈の理論的根拠を要求していたことを述べておられる。^{注2}勝部博士が、哲学者でありながら「国語解釈学」に関心を寄せられ、著書・論文を公にされた背景には、こうした当時の国語教育界の要請があったことも見逃がしてはならないであろう。その意味では、勝部博士の「国語解釈学」もまた、わが国の国語教育実践者にとっての理論的根拠を与え、実践のよりどころを示したにちがいない。

おわりに

以上、勝部博士が「国語解釈学」をどのように考えておられたか、また、そこにはディルタイ解釈学がどのようにとりいれられ、どんな特色と問題点を残しているか、さらに、それは国語教育史上どのような役割をはたしたかを考察してきた。しかしながら、一外国理論がどのように摂取されたかという問題を明らかにするためには、さらに考察をこまやかにしなければならぬし、その歴史的位置と意義を明らかにするためには、その前後および周辺をもっともおさえる必要がある。本稿にとりあげたことは、すべて今後の研究への一試論にすぎない。論中、勝部謙造博士に失礼なことも多々あることと思う。謹んでおわび申しあげたい。

学会編)

注2 このことばは、もとシュライエルマツヘルの言ったもので、ディルタイも「解釈学の成立」(Die Entstehung der Hermeneutik, 1800)の中に引用している。

注3 ディルタイ全集第七巻七二ページ

注4 拙稿「ディルタイ解釈学移入史の予備的考察(1)」(「教育学研究紀要」第六巻二四三ページ、中国四国教育学会編) 勝部謙造博士著「国語解釈学」(昭和13・7・15三十刷、晃文社刊)二八―二九ページ

(本学大学院学生)

(昭和38年4月26日稿)

注1 拙稿「ディルタイ解釈学移入史の予備的考察(1)(2)」(「教育学研究紀要」第六・七巻 昭和35年36年 中国四国教育

学研究紀要」第六・七巻 昭和35年36年 中国四国教育